月刊ウィーン GEKKAN-WIEN April 2019 Nr. 355 gegründet 1989 平成元年創刊

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊31年目 Nr. 355
2019年4月号

Rudolf von Alt Das Treppenhaus des k.k. Hof-Operntheaters 1873 Aquarell © LIECHTENSTEIN. The Princely Collections, Vaduz–Vienna

杉本純の 原子力の話Ⅱ ウィーンと京都 88

日本原子力学会は、設立六〇周年記念事業の一環として、四月二五日に東京工業大学（東京目黒区）で「創立六〇周年シンポジウム―震災をこえて 原子力の明日―」を開催する。同学会の駒野康男会長（三菱重工）が三月七日の記者会見でそのように述べた。日本原子力学会は二月に設立から六〇周年を迎えた。同シンポジウムでは、二〇一一年三月一一日に発生した東日本大震災・福島第一原子力発電所事故への対応を含め、学会のこれまでの活動を振り返り、原子力の平和利用に対する信頼回復と新たな発展を展望する。

日本原子力学会では、福島第一原子力発電所事故発生直後より、専門家集団としての立場から、事故に関する（1）情報の収集・分析・評価、（2）反省・教訓の抽出および提言、（3）社会への正しく分かりやすい情報発信、（4）関連学協会との連携、（5）海外との情報交換―といった取組を進めてきた。例えば、福島復興に関する活動としては、二〇一二年に立ち上げられた「福島特別プロジェクト」があり、被災地における除染、放射線影響、風評被害などに関わる支援・助言を行っている。

また、設立六〇周年記念事業として、この他、福島第一原子力発電所事故以降の原子力を巡る状況について、一般市民や学生らを対象にわかりやすくまとめた「原子力のいまと明日」を三月二〇日に発刊する。一九九八年に刊行（二〇一一年の事故発生直前に改訂）された「原子力がひらく世紀」の姉妹版となるもので、事故の推移と発電所の現状、廃炉への道のり、事故の教訓を踏まえた安全性向上の取組、放射線の人体影響、風評被害、国内外における原子力利用の状況、次世代原子炉の研究開発、人材育成などを取り上げている。

https://www.jaif.or.jp/190312-1

記者会見には、山口彰副会長（東京大学）も同席し、四月より新たに「確率論的リスク評価（PRA）の活用および手法調査」に関する研究専門委員会を立ち上げることを紹介した。同氏は、複数基の相互作用に関わる「サイトレベルPRA」など、近年の技術進展も踏まえ、PRAに関する最新知見の調査を実施し若手研究・技術者の育成にも寄与したいとしている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市が生んだ生年が近い著名な画家について述べてみたい。グスタフ・クリムトは一八六二年ウィーン郊外のバウムガルテンに生まれた。父はボヘミア出身の彫版師、母は地元ウィーン出身、七人兄弟の第二子であった。七六年に博物館付属工芸学校に入学し、卒業後、級友と後には弟たちを加えて装飾工芸の共同制作に従事する。ブルグ劇場の階段装飾壁画を手掛け、皇帝フランツ・ヨーゼフから勲章を賜った。九四年には、教育省からウィーン大学大講堂の天井画の正式な注文を受ける。九七年には四〇人ほどの前衛画家たちとウィーン分離派を結成し、クリムトが初代会長を務めた。一九〇三年、イタリアでビザンツ美術に触れてからは、金色を大胆に使う作品で、独自のスタイルを確立。『接吻』はその代表作といえよう。その後、分離派を脱退し、〇六年にはオーストリア芸術家同盟を結成。一三年ころからスラブ系や東洋系の装飾要素も取り入れるようになる。

一方、竹内栖鳳（せいほう）は、一八六四年、京都市中京区の川魚料理屋の一人息子として生まれた。七七年に四条派の土田英林に絵を習い始め、一七歳の時に同派の円山・四条派の幸野楳嶺の私塾へ正式に入門。この頃から頭角を現し、翌年には私塾の工芸長となった。八七年に京都府画学校（現：京都市立芸術大学）を修了。八九年には京都府画学校に出仕し、若手画家の先鋭として名をあげてゆく。九一年に青年画家懇親会を興す。九三年にシカゴ万博に出品。九九年、京都市立美術工芸学校の教諭に推挙される。一九〇〇年、パリ万博で『雪中燥雀』が銀牌を受賞。その後、帝展（現日展）審査員を務め、帝室技芸員に推挙され、名実ともに京都画壇の筆頭としての地位を確立。〇九年、京都市立絵画専門学校（現・京都市立芸術大学）開設とともに教授に就任。近代日本画の先駆者とされ、『班猫』が代表作。三七年に第一回文化勲章を受賞した。

余談であるが、ウィーン駐在時に『接吻』や『ユディトⅠ』を含む世界最大のクリムト・コレクションがあるベルヴェデーレ上宮の常設展示をよく観た。京都では京都市美術館にある竹内栖鳳の『絵になる最初』（重要文化財）などを観た。両市の生年が近い著名な画家にまつわる話を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部撮影のクリムトの最期のアトリエ写真を掲載させていただく。

■杉本純　元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長■

杉本純の原子力の話Ⅱ「ウィーンと京都」の第１回からの全記事が次のサイトに掲載されています： http://wattandedison.com/Sugimoto.html

トーンキュンストラー管弦楽団首席指揮者 佐渡裕さん 2025 年まで契約延期

先月 20 日にウィーンで署名された。佐渡さんは 2015 年夏から同ポジションにあり、以来ウィーン楽友協会では約 150 回の演奏を行ってきた。先月の楽友協会でのマーラー５番演奏会は立ち見も含め完売で、続くドイツツアーではハンブルクでも完売、スタンディングオベーションとなった。ハンブルク版ライヴ CD が近々発売される。